

大原美術館

所在地 岡山県倉敷市
建物用途 美術館
竣工 1930年
所有者 財団法人大原美術館
設計者 株式会社浦辺設計
施工者 株式会社藤木工務店
維持管理者 財団法人大原美術館



〈審査評〉 大原美術館は、1930年に47歳で他界した洋画家、児島虎次郎の業績を記念するために、倉敷紡績の創設者である大原孝四郎の息子、大原孫三郎によって設立された。虎次郎は美術展に一等入選したことにより孫三郎から欧州留学の機会を与えられ、滞在中に印象派の作品に深い感銘を覚え、孫三郎の理解と支援により、優れた西洋絵画、彫刻、古代エジプト美術品、中近東の古陶磁器などを収集することになる。この収集をきっかけとした美術館の設立は、虎次郎と孫三郎の深い友愛の結実がもたらしたものであり、コレクションの先見性は西洋美術に対する日本人の意識のベースをつくりあげたと共に「西洋美術館」の概念をつくりあげたとされている。建物（本館）はイオニア式神殿をモチーフにした重厚な外観をしており、虎次郎と交遊のあった建築家、薬師寺主計の設計によるものである。

第二次大戦後、孫三郎の養子、大原總一郎は先代の遺志をつぎ、豊富で多彩な作品を集めることになったことを機に、1961年に分館、同年に民家の米倉を改装した工芸館を建設する。バーナード・リーチ、富本憲吉、河井寛次郎、浜田庄司らの陶器館、さらに1963年に棟方志功、芹沢珪介の版画・染色館が増設され、工芸館として完成することになる。1970年に東洋館、1987年に分館地下の現代美術館、1991年には開館60周年を記念して本館に展示棟・事務棟が増設され現在に至っている。これらの建物は、大原總一郎の「保存と調和を図りながら倉敷をローデンプルグのような世界的な文化観光都市にしたい」という夢とロマンに共鳴した建築家、浦辺鎮太郎とその弟子達によって設計され、個性的な展示空間を演出すると共に多彩な手法を駆使し、周辺の民家群と調和して新たな風景となる環境をつくりだしている。また、それぞれの建物と建物をつなぐ経路空間は、巧みな操作により回遊する人々に感動とやすらぎを与えている。更に工芸館と東洋館の改造は芹沢珪介のデザインによるものであるが、豊かな色彩感覚と優れた造形力が随所に偲ばれ、この美術館の魅力の一つになっている。

建物の維持管理は美術館の運営者、同設計者、同施工者が三位一体となって緻密な運営管理を行い、維持保全に当たっている。年間100万人近く訪れる倉敷の中心的施設として、清掃と補修が絶え間なく行われており、建物と環境に常に新鮮な息吹きを与え続けている。運営資金は全て入館料で賄うと共に、青い帽子に青い服を着たウエルカム・ガイドが、美術館と関係なく、ボランティア活動の一環として無報酬で訪れる人々を案内するなど、市民も参画した運営管理がなされていると言っても過言ではない。

1960年代末に倉敷川の水辺一体を美観地区とし、歴史的街並みの保存に乗り出して以来の持続的な街づくりの活動の象徴であるこの美術館は、住む人と訪れる人の文化の受発信基地の役割を果たすことにより、末永く社会に貢献するものと思われる。

また、1972年に倉敷アイビースクエア構内に児島虎次郎館・児島室、78年に同オリエント室、81年同西洋絵画室を設け、これらの施設を含めて大原美術館と総称しているが、この度の賞からは対象外としている。